

令和3年度 矢掛町立矢掛中学校学校評価書

校長 妹尾 正巳

本校のミッション
ふる里を愛し、社会の持続的な発展に貢献する生徒を育てる。 友愛を重んじ、自分らしく幸福な人生を切り拓いていく生徒を育てる。

学級数	11 学級	児童(生徒・園児)数	247 人
職員数	26 人	家庭数	223 戸
学校関係者評価委員	岡本 邦広(学識経験者・川崎医療福祉大学 准教授) 川上 公一(学識経験者・元県立矢掛高等学校校長) 高月 秀人(学識経験者・県立矢掛高等学校校長) 藤原 立志(地域住民・学識経験者・元小学校長) 岩崎 恭子(地域住民・スクールサポーター) 古城賀津子(地域住民・地域コーディネーター) 大森 宏美(保護者・矢掛中学校PTA会長) 中川 裕之(保護者)		

A 成果をあげている B ほぼ成果をあげている C あまり成果をあげていない D 成果をあげていない

領域	中期目標	単年度目標	具体的計画	達成基準	自己評価	評価
1	確かな学力を身につける。	・主体的・対話的で深い学びの実現と、生徒の「ICT活用」を目指した授業改善を図る。	・ベアやグループ活動による学び合い学習を取り入れ、相互に関わり合える場面を設定し、協同して課題を解決することで活用力を育む。	・ベアやグループでの活動を通して、80%以上の生徒が互いを尊重し合い、仲間の意見をきちんと受け止め、自らの考えを進んで発表している。	・全教科でベアやグループ活動を取り入れている。全校で協同学習に取り組み、話し方や聞き方の学習を行った。 ・岡山県学力・学習状況調査では、1年生では約92.2%(県85.6%)、2年生では82.7%(県82%)の生徒が、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていたと思う。」という設問に対して肯定的な回答をしており、生徒は相互に関わり合う「学び合い」という学習スタイルに効果を感じている。 ・今後はさらなる「深い学び」の実現と「活用力の育成」が課題である。	A
			・各教科の授業で、タブレット端末を効果的に活用できるように研修し、授業改善を図る。	・各教科1日1時間~2時間以上、タブレット端末を効果的に活用する。 ・毎月、ICT支援員によるタブレット研修を行い教職員の技能向上を図る。 ・教職員が日常クラスルームを使うようなしかけをつくる。	・教材によってばらつきはあるものの、多くの教科で毎時間活用できている。いたずらや疑似チャットなど不正な利用も見られたので、情報モラル教育が課題である。 ・毎月の研修で、教員のタブレットの基礎技術は定着できた。来年度は、取組の共有や深まりを行いたい。 ・毎日の掲示板や毎月の職員会議をスプレッドシートなどを使って行っている。健康観察や生徒への日程等の連絡など生徒への活用を広げていきたい。	
			・授業と家庭学習がつながるように工夫する。	・各教科、計画的に家庭学習を提示する。 ・各教科、週に1回は自主学習「うちべん」でする内容について授業でアドバイスをを行う。	・小テストや定期テストに向けて、各教科で計画的に家庭学習を提示することができた。また、この宿題にどのような意味があるのか、どのような基準で評価をするのかについて各教科で説明している。 ・各教科でうちべんの内容についてアドバイスをを行った。特に1年生では曜日ごとに教科を決めることで、週1回教科ごとに取り組む内容を伝えることができた。	
2	確かな学力を身につける。	・学習習慣の確立を図る。	・「生活ノート」と自主学習を切り離しそれぞれの役割を重点化する。	・85%以上の生徒が家庭学習としての自主学習「うちべん」に取り組む、毎朝提出することができている。	・86%の生徒が家庭学習としての自主学習「うちべん」を毎朝提出することができている。また、朝出することができなかった生徒については、毎週1回放課後を使って、「うちべん」に取り組むことで習慣の定着を図っている。生徒の中に自主学習の役割が重点化されている。	A
			・家庭と協力して、年3回の矢掛町家庭学習強化期間の取組を充実させる。また、保護者が適切に支援できるように、学校だよりや学年だよりで啓発していく。	・矢掛町家庭学習強化期間には、家庭学習計画をたて、80%以上の生徒が90分以上の家庭学習に取り組むことができています。 ・学校だよりや学年だよりを月に1度出し、保護者の支援を啓発する。	・矢掛町家庭学習強化期間には、80%以上の生徒が90分以上の家庭学習に取り組むことができています。また、期間前には学校で学習計画をたて、期間中は取組への反省を提出している。 ・学校だよりや学年だよりを月に1度出し、学校の様子や今後の予定について保護者に伝え、支援を啓発することができた。	
			・地域の資源を活用する中で、1学年は地域を学ぶ、2学年は地域で学ぶ、3学年は地域・社会に貢献するという観点で、系統的に取り組む。	・「総合的な学習の時間」に、85%以上の生徒が、自ら課題を設定し、調べたことをまとめ、自分の考えを深めるとともに、まとめた考えを聞く人に分かるように伝える(発表する)などの学習活動を通して、地域に貢献しようとする態度が身についている。	・総合的な学習については、矢掛プロジェクト(地域を学ぶ、地域で学ぶ、地域に貢献する)として、「課題設定」「調査・体験」「発表」と計画的に学習を進める中で、生徒の93.8%(R2年度90%)が「総合的な学習の時間に積極的に参加している」という質問に肯定的に回答している。 [1年]90%以上の生徒が「小学校区紹介」や「ふるさと矢掛大発見」の調べ学習を通して、自らの設定した課題について理解を深め、調べたことを伝えられるようまとめることができた。 [2年]「職場体験学習」の活動を通して、「自分の目標やねらいが達成できたか」という問いに対して、ほぼ全員が「できた」または「概ねできた」と答えることができた。 [3年]「矢掛再発見」では、町の町おこしプログラムを体験することで、矢掛町の魅力や今後の課題について考えることができた。95%の生徒がレポートを通して提案や意見をまとめることができた。「あらためて町の魅力を確認できた」という気持ちをもつことができた。	
3	確かな学力を身につける。	・支持的風土のある学級づくりに努め、生徒の自己肯定感を高める。	・学び合い学習を通して、聴き合える、伝え合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。	・ベアやグループでの活動を通して、80%以上の生徒が互いを尊重し合い、仲間の意見をきちんと受け止め、自らの考えを進んで発表している。	・85%以上の生徒が互いを尊重し合い、仲間の意見をきちんと受け止め、自らの考えを進んで発表している。 ・2学期に岡山大学の高旗先生を招聘し、協同学習の職員研修を行った。3学期も継続して公開授業をもとに協同学習の研修を行う。これを踏まえ、3学期から「発表の仕方」や「話し合い活動」などの授業規律を統一し、聴き合える、伝え合える、繋がり合える学級づくりに取り組むことができた。	A
			・学校行事、学年行事、学級活動などを通して、認め合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。	・学級や学年での協同活動を充実させることにより、85%の生徒が学校生活に充実を感じることができている。	・始業式と終業式のあとに人権についての講話を行うことや、友愛の木を作成することで、学校全体で人権について考える気運を高めることができた。 ・2学期に代議委員と連携して「あいさつチケット」を実施するとともに、あいさつの意義や大切さについて学級で考える取組を行った。その結果、「自分からあいさつをしている」と回答する生徒の割合が1学期の82.9%から90.4%に増加した。	
			・「Good Behavior」チケットの配付や期待される行動の明示など、SWPBIS(学校全体における積極的行動介入および支援)の取組を推進し、生徒の自己肯定感を高めるとともに、生徒や保護者との信頼関係を構築する。	・教員は生徒の良い行動を認め、積極的にGood Behavior チケットを活用して、生徒との信頼関係の構築に努めている。 ・年に3回、学活で生徒同士のチケット交換ができる時間を設定し、生徒間の関係を深めている。 ・80%の生徒がGood Behavior チケットをもらってうれしと感じ、自己肯定感を高めることに役立っている。	・教員は、生徒の良い行動を認めるGood Behavior チケットを活用して、生徒との信頼関係の構築に努めることができた。 ・各学年、年に3回学級活動で生徒同士がチケット交換をする機会を設けた。 ・92%の生徒がチケットをもらってうれしと感じている。学年が上がるにつれて、チケットをもらってももらわなくても自主的によい行いをしようとする生徒が増えた。	
4	支え合う生徒	・認め合える、支え合える、繋がり合える集団づくりをする。	・年3回のアセスを活用し、生徒個人の課題分析や変容の把握をする。学年内で情報の共有をし、支援の方策を構築する。	・教員はアセスの結果を分析、共有することでクラスや学年の生徒それぞれの様子を把握している。特に対人的対応や学習支援が必要な生徒については学年団全体で対応にあたっている。	・アセスを年3回実施し、結果を学年で共有し、支援が必要な生徒の対人的対応や学習支援についての個別対応に役立てることができた。	A
			・生徒会や専門委員会の活動を通して、矢掛中学校三つの誇りが実践できるようにする。	・生徒会本部と各専門委員会が連携して「三つの誇り」に関する取組(あいさつ運動・ノーチャイムデー・ピカピカコンテストなど)を実施する。	・代議委員と協力し毎週月曜日のあいさつ運動や「手伝いチャレンジ」に取り組む、成果を掲示物で周知することで気運を高めることができた。また、整美委員によるピカピカコンテストで掃除の意識を高めることができた。 ・生徒から取組をどのように提案させ、どのように学校全体で共有させて実践していくかということに課題が残る。また、ノーチャイムデーについては天候によって時刻がずれるトラブルがあるため実施できていない。	
			・情報モラル教育を充実させ、情報端末(スマートフォンを含む)を、正しい判断力を持って使えるようにする。	・学活、道徳などで定期的に情報モラルについて考える授業を行って、生徒が正しい知識をもって、積極的に授業でタブレットを使用することができている。	・各学年ごとに、情報モラル、SDGsなどの授業をすることができた。タブレットは多くの授業で積極的に活用することができた。一方でルールに反した使い方をする生徒もいて、利用のルールの共通理解を徹底することが課題になった。	
5	生徒の支援	・学校に適応しにくい生徒への支援を充実する。	・不登校の未然防止に向けて、出前授業や体験授業、相互授業参観など、小・中連携の効果的な取組を行う。	・小学校と連携を取りながら、児童・生徒の様子について情報を共有し、効果的な指導を行うことができています。	・不登校の未然防止のために、入学する前に小学校と連携をとり、児童・児童生徒の情報を共有した。出前授業や体験授業で、児童に中学校の雰囲気や入学前に体験させた。	A
			・スクールカウンセラーや外部の関係機関との連携を一層密にする。必要に応じて、ケース会議を行い、情報共有と支援の方向性について協議する。	・不適応傾向にある生徒については、専門機関(専門家)と連携して支援方針を定め、状況に応じて幅広く、他機関からの援助を得ている。	・心の教室の規約を変更し、登校しにくい生徒の居場所を確保することによって、不登校を未然に防いだケースがあった。ケース会議では、スクールカウンセラーの助言をおおきながら、生徒や保護者に必要な支援を迅速に行った。	
			・生徒指導上の課題の未然防止に向けて、学校アドバイザーの活用や関係機関との連携を密にする。防犯教室や講演会を行い、規律のある落ち着いた学校づくりに取り組む。	・生徒指導の方針を徹底し、学校アドバイザーや関係機関と連携をとることで、落ち着いて学習できる環境を整えるとともに、講演会などで生徒に社会のルール等を啓発する活動を行い、問題行動を未然に防ぐことができています。	・全校を対象にした情報モラル教室や1年生対象の非行防止教室を実施し、学校アドバイザーの協力を得て校内の見回りなどを継続的に行っている。また、毎週月曜日には生徒指導担当者会を開き、生徒の様子についての情報交換や、指導方針の確認を行っている。休み時間の過ごし方や友人トラブルなどで時折注意をする場面もあるが、概ね落ち着いた生活を送っており、引き続き、問題行動の未然防止のための取組を継続していく。	
6	特別支援教育の充実を図る。	・特別支援教育に関する校内研修を外部講師により、計画的に行う。	・特別支援教育コーディネーターを中心に、教職員や支援員が密に情報を共有し、個別の支援を充実させる。	・教職員と支援員の情報共有が密になされ、教職員の各種委員会でも情報共有の場が設定されている。	・年度初めに教職員と支援員の打合せをもち、その後も特別支援コーディネーター、支援学級担任と支援員が必要な支援について適宜情報交換をした。 ・毎週の生徒指導担当者会で通常学級とともに特別支援学級の生徒に関する情報交換の場を確保している。	B
			・関係機関や専門家、保護者と連携し、個別の支援を充実させる。	・専門指導員派遣事業等を活用し、関係機関や専門家と連携している。 ・保護者と共通理解をもって生徒の支援をしている。	・専門指導員派遣事業を活用し、新入生の授業の様子を参観していただき、個別の対応についてアドバイスをいただいた。 ・保護者と支援学級担任との間で連絡帳をやりとりし、家庭での様子や、学校での様子を情報交換している。	
			・特別支援教育に関する校内研修を外部講師により、計画的に行う。	・生徒の実態に応じて、必要な内容の外部講師による研修を行い、生徒理解を深めている。	・特別支援教育に関する外部講師による研修はできなかった。次年度は研修の機会をもちたい。	

分析・改善方針

・2年間の研究指定を受けている人権教育の推進を軸に、学校全体で取組の工夫を推進できている。「学力向上部会」では協同学習の研修・授業規律のルールづくり。「集団形成部会」では「あいさつチケット」・「ミニGood Behavior チケット」などの新しい取組。「個別環境部会」ではICTを活用した遠隔授業の取組など。引き続き、取組の充実を図っていくが、それぞれがバラバラな取組にならないよう、「友愛」をキーワードに、一つの方向に推進できるようにしていく。

・「うちべん」の取組によって、家庭で主体的な学習に取り組む生徒の割合が増えているが、学習内容に偏りがあったり、依然として十分な取組ができていない生徒がいるなどの課題がある。そこで、更なる「うちべん」取組を工夫していくための研究や、個別指導を充実に向けて改善していく。

・毎月のICT研修で、授業等でのタブレット使用は増加している。しかし、生徒の情報モラルに課題があることから、ルールの徹底や指導法の工夫について研修を通して改善していく。

・不登校対策別室指導教員の配置により、不登校対策として心の教室は充実しているが、加配終了後の持続可能な運営について、検討していく必要がある。

学校関係者評価

コロナ禍の中でも、生徒たちは前向きな生活ができています。修学旅行も実施できてよかった。生徒は明るい雰囲気学校生活が送れている。あいさつもよくできている。

1 課題への対応

不登校は本校の長年の課題である。心の教室の対応はうまくいっている。ひまわりの家との連携がさらに進むとよい。不登校生徒支援のためにタブレットを活用してほしい。グループ学習やペア学習がよくできている。家庭学習の充実に向けて学校は積極的にかかわっている。生活ノートと学習ノートを分けたり、よい自主学習ノートを掲示したりするなど工夫できている。教育課題を的確に捉え前向きに取り組んでいる姿勢は評価に値する。オンライン・タブレットを活用した教育については、効果上がるようにさらに研究してほしい。

2 学校・家庭・地域の連携

「学校に相談しにくい」という保護者の回答の増加は具撃に受け止め、コミュニケーションの取り方の工夫など学校と家庭との連携をより強固なものにしてほしい。保護者の本音を吸い上げ職員で共通理解するようになってほしい。家庭訪問については小中で揃える必要がある。中高の連携は積極的になされており、県下のモデルとなる活動であろう。

3 学校評価

分かりやすい自己評価になっている。来年度に生かせる分析・改善方針になるよう、具体的に焦点化された対応策を求めたい。「～をした」から、さらに進めて「～をした結果、生徒は～と変わった」と変容の様子を示してほしい。生徒・保護者の意見の把握はよくできている。評価に関わるアンケートや評価自体が教職員の負担にならないようにしてほしい。「働き方改革」が求められる中、オンラインでのアンケート集約など効率化が図られている。

来年度の重点・方針

1 確かな学力を身につけさせる。

- ①ICTを活用しながら、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業改善を図る。
 - ・ペアやグループ活動による学び合い学習を取り入れ、相互に関わり合える場面を設定し、協同して課題を解決することで活用力を育む。
 - ・各教科の授業で、タブレット端末を効果的に活用できるように研修し、授業改善を図る。
- ②学習習慣の確立を図る。
 - ・授業と家庭学習がつながるように工夫する。
 - ・「うちべん」で家庭学習を定着させる一助とする。
 - ・家庭と協力して、年3回の矢掛町家庭学習強化期間の取組を充実させる。また、保護者が適切に支援できるように、学校だよりや学年だよりで啓発していく。
- ③総合的な学習の時間を系統性のある取組にする。
 - ・地域の資源を活用する中で、1学年は地域を学ぶ、2学年は地域で学ぶ、3学年は地域・社会に貢献するという観点で、系統的に取り組む。

2 認め合える、支え合える、繋がり合える集団づくりをする。

- ①支持的風土のある学級づくりに努め、生徒の自己肯定感を高める。
 - ・学び合い学習を通して、聴き合える、伝え合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。
 - ・学校行事、学年行事、学級活動などを通して、認め合える、繋がり合える学級づくりに取り組む。
 - ・「Good Behavior」チケットの配付や期待される行動の明示など、SWPBIS（学校全体における積極的行動介入および支援）の取組を推進し、生徒の自己肯定感を高めるとともに、生徒や保護者との信頼関係を構築する。
 - ・年3回のアセスを活用し、生徒個人の課題分析や変容の把握をする。学年内で情報の共有をし、支援の方策を構築する。
- ②社会的実践力が身につくようにする。
 - ・教師が意識して生徒会や専門委員会の活動を通して、矢掛中学校三つの誇りが実践できるようにする。
 - ・情報モラル教育を充実させ、情報端末（スマートフォンも含む）を、正しい判断力を持って使えるようにする。
 - ・「地域を支える学校」として、生徒が自主的に地域の活動に参加するよう支援し、参加の状況を積極的に公開する。

3 学校生活に適応できるように個別の支援を充実する。

- ①学校に適応しにくい生徒への支援を充実する。
 - ・中1ギャップの解消に向けて、出前授業や体験授業、小学校への授業参観など、小・中連携の効果的な取組を行う。
 - ・不登校対策担当を中心に、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、外部の関係機関との連携を一層密にする。必要に応じて、ケース会議を行い、情報共有と支援の方向性について協議し、取り組む。
 - ・別室指導において、個々の生徒の状況に応じてICT活用や授業配信を積極的に取り入れ、学習支援・生活支援を行う。別室生徒の個別的教育支援計画の作成。
 - ・長期休業中やテスト週間、場合によっては放課後に個別指導の機会を設定する。
 - ・教育相談や学校生活アンケート、生活ノートにより、生徒に関する情報を集めたりすることで、困り感やいじめの早期発見、早期対応に努める。
 - ・定期的に教育相談委員会をひらき、情報共有を行う。
- ②特別支援教育の充実を図る。
 - ・特別支援教育コーディネーターを中心に、教職員や支援員が密に情報を共有し、個別の支援を充実させる。
 - ・関係機関や専門家、保護者と連携し、個別の支援を充実させる。
 - ・特別支援教育に関する校内研修を外部講師により、計画的に行う。
 - ・「個別的教育支援計画」の作成を通し、支援を必要とする生徒への配慮等の情報共有をする。また、方策を具体的に考えて対応する。